

This is Niessing

1873年、ドイツ西部の美しくのどかな中世風の都市、フレーデンでウエディングリング専門の工房として創業した「ニーシング」。以来、ニーシングは画期的な合金や器具を開発し、さまざまな技術革新を成し遂げてきた。その姿勢は20世紀以降のデザインの礎とされる造形学校、バウハウスの理念と深く結びついており、新たなデザインが生み出される時には常に技術が寄り添っている。クラシックなデザインであれ、革新的な表現であれ、その作品がニーシングである限りクオリティの高さは揺らぐことがない。

ニーシングの長い歴史の中で、脈々と受け継がれてきた職人技。その伝統的技術と先端テクノロジーの融合による独自の製法こそが、ニーシングの根幹となっている。というのも、ニーシングは常に「アイデアありき」なのだ。不可能に思えるアイデアを具現化するためには、豊富な経験と高度な技術が要求される。デザイナーと地金職人は、互いに多くの時間を費やし、何度も試作を重ねて新しいアイデアを形にしていく。ゴールド、プラチナ、ダイヤモンド、そしてスチールや高品質なシンセティックジュエル。素材そのものの美しさを、究極にしてピュアなフォルムによって語るのである。

ひとつのアイデアが製品化されるまで、ニーシングのデザインチームは妥協を許さない。デザイナーたちは伝統を大切にしながら、常に新しい魅力をジュエリーデザインに付与するために努力し、どんな些細なことにもこだわりを持って挑戦する。その熱意は、時にはデザインアワードの受賞という思わぬプレゼントをもたらすことがある。特に、デザインの世界において権威を誇るレッドドット・デザインアワードやiFデザイン賞の受賞はニーシングの誇りである。

アートとしても高い評価を受ける「The Niessing Ring（ザ・ニーシングリング）」をひとつの象徴として、現在のニーシングはモダンジュエリーブランドとして確固とした地位を築いている。

「The Niessing Ring」が象徴するように、ニーシングのジュエリーはひと目でそれとわかる研ぎ澄まされたシンプルさを備えている。どの作品にも純粋なアイデアが表現されており、ジュエリーとしての美しさの源になっている。それぞれのジュエリーが物語る、それぞれのストーリー。身につける人は、ジュエリーによって自己を表現することができる。まるで音楽を聴いた時のように、心の琴線に触れ、新しい感覚を目覚めさせてくれる。その人の美しさを強調するとともに、癒やしや喜びを提供するように考え尽くされているのだ。ひとり一人の個性を引き立て、その日の気分で対話できるのが、ニーシングのジュエリーの魅力である。

The Niessing Ring

まるでダイヤモンドが浮遊しているかのようなデザイン。宝石を留める爪がないため、あらゆる角度から光を集め、ダイヤモンド本来の美しさを最大限に引き出すことに成功した画期的なリング。まさに、ニーシングのデザイン哲学を象徴するリングだ。

1979年に開発され、後に特許を取得した「ザ・ニーシングリング」誕生の背景には、ある一人の女性の存在があった。創業者の孫娘、ウズラー・エクスナー（中央写真の女性）。文化や芸術に造詣が深く、既成概念にとらわれない自由な発想を持つ彼女は、ドイツの造形学校「バウハウス」の哲学に深く共感。リングに不可欠なアームと石の二つだけを残し、石を留める醜い爪をデザインから消失させることを考えた。要請を受けたデザイナー、ウォルター・ウィテック（右写真の男性）と職人達がウズラーの発想を形にできたのは、実に2年後のこと。「物事を純粋に、さらに明確に捉えるため、本当に必要なものだけを残す」バウハウスの理念を体現したジュエリーが完成した。地金の張力のみで宝石を完璧に支える画期的な発明は、世界に大きな衝撃を与えた。

ダイヤモンドがあらゆる角度から光を集め、本来の美しさを最大限に発揮するこの独自のセッティング方法はニーシングが開発した背景が明確に分かるように「ニーシングセッティング」と呼ばれ、現在も見ると人を驚嘆させるデザインと人間工学に基づく素晴らしい着け心地でロングセラーを続けている。美術品としてもその価値を高め続ける「ザ・ニーシングリング」。ニーシング=モダンジュエリーの地位を揺るぎないものにしている。



- 1979年 ウォルター・ウィテックがニーシングリングを発明する
- 1993年 ライプツィヒ・グラス博物館にコレクション展示される
- 1994年 国立工芸美術館（ノルウェー・オスロ）にコレクション展示される
- 1999年 ブッセ・ロングライフデザイン最優秀賞受賞
- 1999年 科学博物館（オーストリア・ウィーン）にコレクション展示される
- 2001年 芸術品として認められ、ウォルター・ウィテックのオリジナル作品として著作権を得る
- 2003年 美術工芸博物館（ハンブルグ）にコレクション展示される

ゴールドのグラデーションを可能にする卓越した冶金術

レッドからグレーへと変化するグラデーションが美しいリング「Aura（オーラ）」。

これは表面の色だけを変化させているのではなく、冶金によって金属の組成を操った成果として生み出された。冶金とは、リングやネックレスの素材である金属板を製造する際の金属の配合技術のこと。優れたデザインのジュエリーをつくり出すには、素材となる地金をいかに巧みに扱うかがきわめて重要になってくる。

ドイツのプラチナ市場活性化のきっかけとなった、純金とプラチナを溶接する技術を1975年に開発するなど、Niessingはこれまでも優れた冶金術によってジュエリー界に旋風を巻き起こしてきた。なかでも純金に銀、銅、パラジウムなどを加えて多彩なカラーリングを実現した18金合金は、このブランドがジュエリー製作において冶金術の重要性を高く認識している証である。

ジュエリーでは、主要な材料に純金（24K）を用いることは少ない。純金のままでは強度に欠けるからだ。それを補うために他の金属を割り合わせて合金にすることで、ゴールドの色合いは大きく変化する。例えばパラジウムを加えればグレー系、銀ならグリーン系、銅ならレッド系、銀と銅を共に合金すればイエロー系になる。この特性を活かして、ゴールドを基調に多彩な色合いをつくり出すのが世界トップレベルの冶金術である。その工程は、単に数値的な割合だけが問題となるのではない。正確な温度調整をはじめ、長年かけて培われた職人の経験と勤が不可欠なのだ。ニーシングの職人の技術は、原料の調達から製造まで、すべての工程をほぼ自社内で行うことで着実に継承されてきた。

ニーシングの製造部門やデザイン部門は、ブランドの本拠地であるドイツ西部の街、フレーデン近郊に集中している。コスト削減のため生産拠点を海外へ移し、工程を分業化するメーカーが多い現在では、希少な体制と言えるだろう。この体制によって蓄積された知識やデータが受け継がれ、また技術の流出も防げるため、オリジナリティあふれるジュエリーをつくり続けることができる。優れた冶金術は、より自由なデザインを可能にする。また自由なデザインを実現するために、冶金術は常に進化し続けている。

機能と造形美を一体化 ジュエリーの新しい価値観

ニーシングでは、新たなジュエリーを製作するたびにコンセプトを設定し、その実現を目指して技術の選択が行われる。「Performance（パフォーマンス）」は、リングの外周だけに純金を使用した。純金は金属の中でも柔らかい部類であり、リングに用いる場合はふさわしい硬度を得るために他の金属との合金とするのが一般的だ。しかし、このリングではその柔らかさをデザインに活かしている。長く身につけるにつれて純金部分にはキズやへこみが生まれる。それは持ち主によってリングがさまざまに表情を変えることを意味し、やがて誰のものでもない唯一無二の存在となるのだ。ジュエリーが、身につける人の美意識を雄弁に語る。ジュエリーと人とのコミュニケーションを提案するニーシングの理想が、このリングに込められている。

長く身につけるとともに生まれるキズやへこみは、すなわち人生のアップダウンの象徴。いいことも悪いこともすべてが夫婦にとっての実りであり、いつしかそれが2人にしか辿り着くことのできない家族の姿となる。一方、リングの内側に使われている硬質プラチナは、どんなに表面的な変化があったとしても、決して変わらない2人の深い絆を表す。こうした表現は、1975年に発明されたゴールドとプラチナの溶接技術によって可能になった。斬新なコンセプトと高度な技術が、ジュエリーの新しい価値観を生み出したのだ。

バウハウスの流れを汲む究極のシンプル-ブランドフィロソフィー

ニーシングのブランドフィロソフィーである「形態は機能に従う」という理念は、造形学校バウハウスの考え方に通じるものであり、突き詰めると必然的にシンプルなデザインへと辿り着く。形状、素材、技術という絶対的な要素で成立しているジュエリーからは、一切の余計な要素が省かれている。高い技術を用いて素材の特性を引き出していくと、形態は自然に導かれるのだ。これは、地金から自社内で製造しているからこそ可能なアプローチとも言えるだろう。1873年の創業以来、最新のテクノロジーを取り入れながら発展してきたニーシング。伝統を大切にしながら、未知の表現を新しいデザインによって実現し続け、妥協することなくものづくりに向き合う真摯な姿勢。フレーデンで創業して以来、約140年にわたって発展してきたニーシングのフィロソフィーは、マイスターたちの卓越した技術力に支えられながら、革新的なジュエリーを創造し続けている。

ではジュエリー界におけるモダニズムの先駆者は、どのようにデザインフィロソフィーを確立してきたのだろうか。その軌跡を辿ると、ひとりのキーパーソンが浮かび上がる。創業者ヘルマン・ニーシングの孫であり、2代目社長フランツ・ニーシングの娘、ウズラー・エクスナーである。ニーシングは、シームレスを実現した鍛造方法やさまざまな工作機械を開発し、いつしか技術面においてマリッジリング界を牽引する存在となった。やがて1970年代に入り、文化や芸術に造詣の深いウズラーのディレクションのもとでデザイン哲学が定義されたことで、大きな転換期を迎えたのだ。

1924年に生まれたウズラー・エクスナーは、高等教育修了後にジュエリー学校へ進学。その後、グラニュレーション技法を再発見したことで有名なドイツ人デザイナー、エリザベート・トレスカヴの工房で働きながら金細工の技術を習得した。さらに建築家のマックス・フォン・ヒュウセンとの出会いが、彼女をデザイナーとしても大きく成長させる。彼は「非論理的なフォルムは人に不快感を与える」と主張し、ジュエリーに装飾を施しすぎないようにウズラーに忠告した。論理に基づいてデザインを構築していくヒュウセンのバウハウス的な姿勢は、まさに現在のNiessingのデザイン哲学と一致する。

1974年、Niessingは初めてモダンシリーズ「Setario (セタリオ)」を発表。これは異なるカラーのリングをパズルのように組み合わせ、バリエーションを楽しむことができる斬新なシリーズだった。商品開発を担当したのはウズラーである。当時のマリッジリングはジュエリーに分類されなかったため、マリッジリング専門ブランドとして認識されていたNiessingは「Setario」によってジュエリー市場での存在感を大きく高めた。ウズラーはまた、広告などのプロモーション戦略においても優れた能力を発揮した。彼女は1986年に世を去ったが、その創造性はニーシングのラインアップに多大な影響を及ぼし、今なお息づいている。